

の進歩でノリ収入の方が多く、市内でも恵まれた漁業経営を行なっているが、10年前までは7:3の割合で農業に力を入れた漁村であった。そして以上のような相違は立地条件に起因しているところが多いと思われる。即ち、響灘側は岩石海岸が卓越し、平地がとほしく、又-10m前後の海底に岩礁が多く存在しているために、魚類および水産動物(サザエ・アワビ・ウニ)の成育に適している。そのため漁業を専業とし、磯見漁業や網漁業が主で、特に-10m以深の沖の海底は砂泥が広く分布しているのでエビやカレイなどの底生魚が多く、小型底曳網漁業が盛んである。他方、周防灘側は吉田川・神田川の河口であり平地にとほしい当市にあって比較的広い平地が存在し、ノリ成育に必要な肥料・光・CO₂が豊富な-7m前後の海域が広く分布し、特に冷凍網などの養殖技術の進歩する以前にあってはノリ養殖にとって必須の条件であった干出時間が4時間半以上という点は、内海であるために十分に満たされ、あくまでも兼業という型でノリ養殖中心に漁業が行なわれている。次に下関海峡内は、主要航路である事、および潮流が速いことなどで操業条件としては良くないが、急潮流のために海水の交換が良く、昔から良質のワカメの繁茂地であり、又、潮流の方向が変化するために、内海と外海の魚種が取れ、特に、タイ・スズキなどの中・高級魚が取れるので、釣漁業中心で漁業を専業としている。

当市は都市的色彩が濃く、そのため他産業の労働力需要も多いので漁民人口の減少および老令化が目立ち、特にこの傾向は市街地から離れた漁村で顕著である。その理由はモータリゼーションにより通勤が可能になった事および漁業の魅力が低下したためである。他方、市街地の漁協がこの傾向が微弱なのは下関漁港を根拠地としているために漁獲物流通面で優位にあり、漁船の大型化により沖合へも進出しているからである。又、全漁協の傾向として、養殖漁業に力を入れている。

佐伯市の水産地理学的考察

栗 田 逸 子

佐伯湾は典型的なリアス式海岸をなし、魚類繁殖に適する無数の岩礁が発達しており、天然の良湾と漁港に恵まれ古くから沿岸漁業が盛んであった。

佐伯市の漁業は大半を大入島に頼っている。大入島では全戸数のうち約半数(689戸中365戸)が漁業に従事しており、島の代表的漁法としては、イワシ船曳網・延縄・小型機船底曳網・一

本釣などがあげられる。大入島の漁業は小規模であり、それに加えて後継者不足で島の漁業は衰退の一途をたどっている。その上約1 Kmの対岸にある興人パルプ工場の廃液による公害問題が起こっており、真珠養殖やハマチ養殖はその漁場を廃液の影響のない水域に移している現状である。

また佐伯市以外の地域から出て佐伯湾で漁業活動を行なっている町としては鶴見町と上浦町があるが、上浦町は漁村とは名ばかりで漁船の隻数も少なく、沿岸漁業は労働力不足で潰滅寸前にある。しかし鶴見町では比較的漁業が盛んに行なわれており、漁業従事者は全就業者の31.5%を占めている。漁業形態としては、旋網・巾着網・曳網・小型機船底曳網・一本釣・延縄・突棒漁業などが普及している。

漁業の近代化の波にのり遅れたことや、魚の乱獲による漁業資源の欠乏により、沿岸漁業の衰退は著しい。この対策として真珠・ハマチ・カキ等の養殖が行なわれている。真珠養殖は気候温和にして波静かな鶴見半島の諸入江で、ハマチ養殖はリアス式海岸地形と種苗の確保・飼料の入手などの好条件に恵まれた鶴見町の沖松浦・有明海・羽出浦で行なわれている。またハマチのほか、タイが鶴見町で、ワカメ・ノリが上浦町で養殖されている。更に佐伯湾北部の上浦町津井には、瀬戸内海栽培漁業センターや大分県水産試験場があり、養殖漁業の発展に貢献している。

このように養殖業が盛んになるにつれ、佐伯市にある興人佐伯工場から放出される廃液被害が問題になっている。大入島の石間部落では、岸壁までも暗黒色に染まっており一種独特の臭気が鼻をつく。そのため島の南岸では漁業はいっさいできなくなり、また赤線区域といって貝や磯草の生育が全くみられない区域の存在もみとめられる。しかしこのような被害は局部に限られ、全体として漁獲高は近年の価格の上昇のため、かえって多くなっているという。とはいうものの漁業資源に食生活の依存度が高まっている近年、一時でも早く養殖可能な佐伯湾がよみがえることが望まれる。

また大分県による魚介類の大増殖海域の設定や、輪採制を行なうなどの海面管理機構の設置がなされ、資源の効率的な利用が図られている。

相模野中南部の地理学的考察

島 田 文 子

本論文は研究地域は相模野の中南部，神奈川県座間市，海老名市，高座郡綾瀬町および寒川町